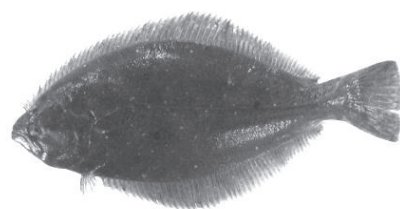


# ヒラメ

*Paralichthys olivaceus*

地方名  
あおば、てっくい



## 生態

- ①寿命：オス 10 年以上、メス 20 年以上
- ②成熟：オス 2 歳以上、メス 3 歳以上
- ③産卵期：5 月～7 月
- ④産卵場：水深 30m 以浅の粗砂及び砂礫地帯
- ⑤分布：千島列島から九州、東シナ海に分布
- ⑥生態：産卵後 1 日～2 日でふ化し、約 1 ヶ月間の浮遊期間の後に水深 10m 以浅の砂または砂泥域に着底し、成長に伴い深所へ移動する。生息域は水深 100m 以浅の海域。季節的に深浅移動する。稚魚はアミ類を主に摂餌し、成長とともに魚類、イカ類を捕食する。

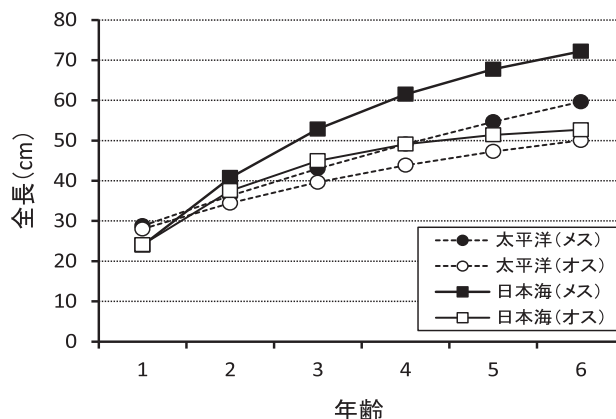


図 青森県におけるヒラメの成長

出典：太平洋：Yoneda et al. (2007) Fisheries Science. 73, 585-592.  
日本海：吉田ら (2011) 青産技セ水研研報. 7, 1-8.

## 主な漁業

ヒラメはほぼ周年にわたって県内全域で漁獲される。日本海から津軽海峡西部にかけては 5 月～7 月に底建網・一本釣で、陸奥湾から太平洋北部にかけては 5 月～7 月及び 11 月～翌年 1 月に定置網・底建網・刺し網で、太平洋南部では 9 月～10 月に刺し網で、11 月～翌年 5 月に小型底びき網で漁獲される。1 歳～2 歳が主体的に漁獲される。

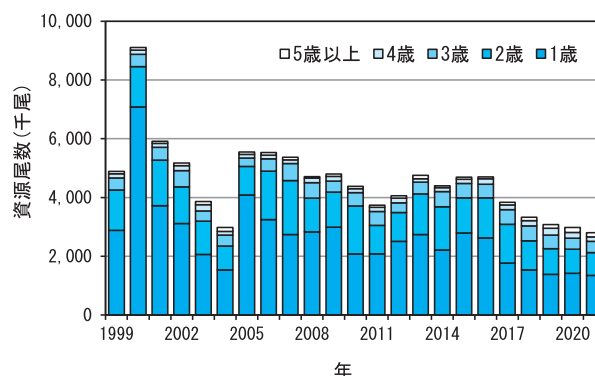


図 青森県のヒラメの年齢別資源尾数の推移

## 資源の動向と水準

青森県の資源尾数は 2000 年に 9,053 千尾と 1999 年以降最高となったが、翌 2001 年に減少に転じ 2004 年に 2,978 千尾となった。2005 年に 5,551 千尾に増加し、以降は増減しながらも横ばいであったが、2017 年から減少傾向となり、2021 年の資源尾数は 2,803 千尾であった。

2022 年の資源動向は、コホート解析により推定した資源量の直近 5 年間の傾きから減少と判断した。2022 年の資源水準は、長期間データを有する漁獲量を判断材料とし、その最高値と最低値との間を 3 等分し、上から高位、中位、低位とすると、中位であった。



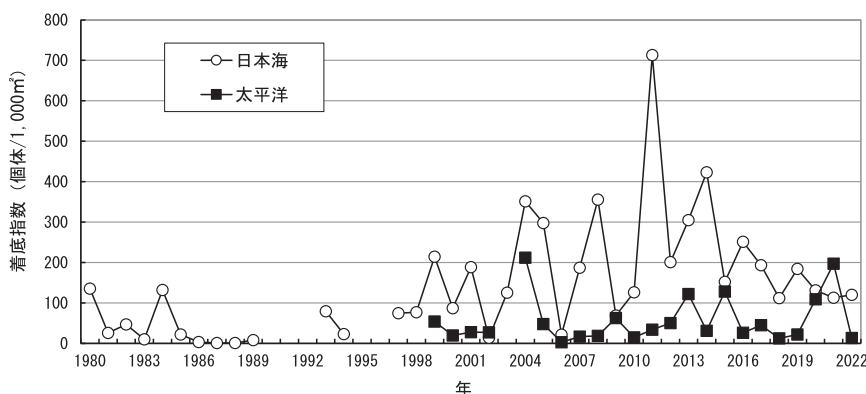


図 発生年別ヒラメの着底指数の推移

(日本海ヒラメ稚魚発生量)

2022年のヒラメ稚魚の着底指数は120で、1980年年以降の平均値147を下回る水準であった。

(太平洋ヒラメ稚魚発生量)

2022年のヒラメ稚魚の着底指数は13で、1999年以降の平均値58を下回り、過去3番目に低い水準であった。

\*着底指数：発生量の指標値。日本海はつがる市沖、太平洋は三沢市沖で夏期に着底稚魚調査を実施。水深別の平均分布密度（個体/1,000m<sup>2</sup>）の年最高値。

## 海域別漁獲量及び漁獲金額

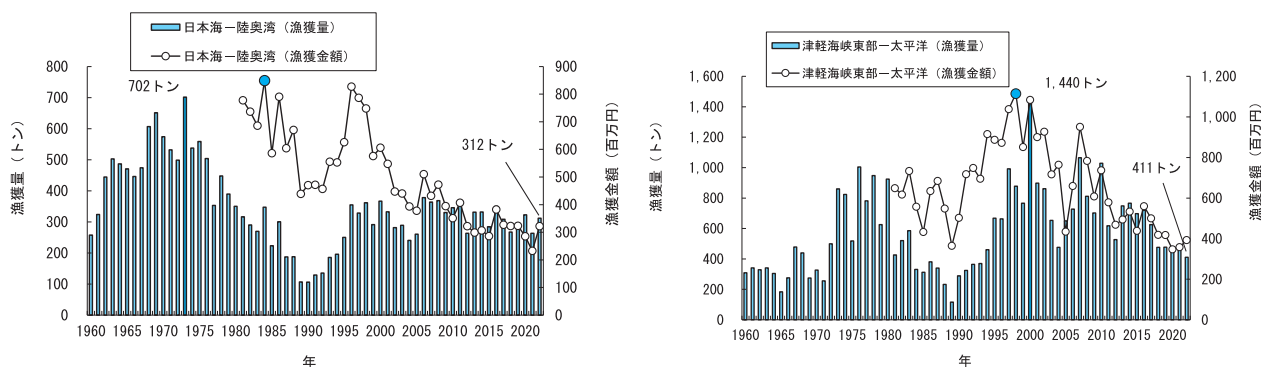


図 青森県におけるヒラメの海域別漁獲量及び漁獲金額の推移

\*日本海-陸奥湾海域：大間越漁協から小泊漁協に、津軽海峡西部の竜飛今別漁協、三厩漁協、陸奥湾の外ヶ浜漁協から脇野沢村漁協を含むものとした。

\*津軽海峡東部-太平洋海域：階上漁協から尻屋漁協に、津軽海峡東部の佐井村漁協から岩屋漁協を含むものとした。

## 資源を上手に利用するために

○ひらめ資源管理指針（1990年3月）、資源管理計画（日本海：1994年3月、太平洋：1996年3月）

・全長35cm未満個体の再放流の他、刺し網についてはひらめ網の目合制限（6.0寸以上）、三枚網の禁止、留網の禁止などを定めている。

○青森県太平洋海域ヒラメ資源回復計画（2008年3月）

・小型ヒラメの保護を推進するため、刺し網漁業では9月～12月の水深10m以浅の区域、小型機船底びき網漁業は北緯41度以南の水深100m以浅の区域におけるヒラメを目的とした操業の自粛を定めている。

☆上記の取組を継続することが必要である。

## トピックス

・1988年に「県の魚」に制定される。

・2022年の放流尾数は102.2万尾となっており、「青森県水産動物の種苗の生産及び放流並びに水産動物の育成に関する基本計画」に基づき、2023年以降は年間100万尾の計画で種苗放流が行われる予定になっている。